

チョムデンリクレル著『大乗究竟論莊嚴華』
和訳および校訂テクスト（2）
—『宝性論』I.4-22 の注解—

加納 和雄

はじめに

本稿は、前稿（加納 2010）に続く、チョムデンリクレル（bCom ldan rig ral, 1227-1305, 以下リクレル）の手による『宝性論』（Ratnagotravibhāga, 略号 RGV）への注—『大乗究竟論莊嚴華』（rGyud bla ma'i tī ka rgyan gyi me tog）—の訳注研究である。

前稿で指摘したように、ターラナータ（Tāraṇātha, 1575-1634）によるリクレルは、他空説（gzhan stong pa）の祖師たちの系譜において、同説の実質的な創唱者であるトルポパ（Dol po pa Shes rab rgyal mtshan, 1292-1361）よりも以前に位置付けられる。ターラナータのこの言述が史実を反映しているならば、リクレルの『宝性論』注を紐解くことによって、他空説形成に至る思想背景を知るための手掛かりが得られることになる。実際にリクレルの『大乗究竟論莊嚴華』を検討すると、本性光明なる心を如来藏と同体視する点で他空説と方向性を共有する側面がみられる一方、空性と如来藏とを同一視するロデンシェーラブの中観的な如来藏解釈を行う者たちとは、明らかに系統を異にする点が確認される（加納 2010）。確かに、同書のなかに「他空」が術語として用いられることはなく、他空説の思想体系がそのまま表明されることはないが、如来藏説の解説に際して密教典籍を多く援用する点などを加味しても、トルポパの如来藏理解につながる要素の片鱗がリクレルの当該作品の中に確認されるといえる。

前稿では、同書の全体構成をシノプシスとして提示したうえで、『宝性論』I.1-3 に相当する範囲の和訳と校訂テクストを提示した。本稿で扱う範囲は、『宝性論』I.4-22 すなわち三宝解説にたいする注解箇所である。三宝は、『宝性論』はその論全体の骨格である七金剛句（仏・法・僧・界・仏菩提・仏徳・仏業）の前三者にあたる（下記シノプシス参照）。写本 A・B については後述参照。

見出し	写本葉番号	RGV
[4] 七金剛句の詳説	A4b5, B3b5	—
[4.1] 三宝	A4b5, B3b5	—
[4.1.1] 仏宝	A4b6, B4a2	I.4-8
[4.1.2] 法宝	A5b2, B4b1	I.9-12
[4.1.3] 僧宝	A6a3, B5a1	I.13-18
[4.1.4] 三宝の総括	A7a3, B6a1	—
[4.1.4.1] 三宝説示の目的	A7a3, B5b5	I.19
[4.1.4.2] 帰依処と非帰依処の区別	A7a4, B6a1	I.20
[4.1.4.3] 仏のみを帰依処とすること	A7a6, B6a3	I.21
[4.1.4.4] 宝の語義解釈	A7b2, B6a4	I.22

チョムデンリクレルの三宝注解箇所

とりわけ、I.13, 16（僧宝）への注解箇所において、タントラ典籍を多く援用している点は独特であり、注意を喚起する。そこでリクレルは、自心と仏智とを同体視する、いわゆる「即身成仏」に近い立場の教説に深い関心を寄せて、それを如来蔵の解釈の中に持ち込んでいる。換言すると、リクレルは、顯教と密教（中期・後期タントラ文献）との間に横たわる一定の隔たりに対し、その架橋的役割を担う教説として、如来蔵説を位置付けていると理解できる。

校訂および和訳に際して

下掲校訂本の底本には A 写本（ウメ字体写本、van der Kuijp 氏による影印複写本）を使用し、B 写本（『リクレル全集』所収のウチェン字体写本）と校合して校訂テクストを作成した¹。和訳においては、『宝性論』の文言をゴシック体で示し、亀甲括弧〔 〕内には筆者が補った語句を示す。A 写本の葉番号を括弧【 】内に示し、小見出しあは角括弧〔 〕内に示した。

チベット語テクストにおいては、上掲の科文に提示した小見出しあは角括弧〔 〕内に示し、その下に対応する『宝性論』の偈番号を提示した。『宝性論』本文の文言は下線で示した。

【和訳】

[4] (七金剛句の詳説)

〔主題項目の中の〕第四²。七〔金剛〕句の詳説において、

[4.1] (三宝)

第一、三宝を詳説する。まずサンスクリット語の deśa、nirdeśa、pratinirdeśa という語は、〔チベット語で〕説示 (bstan pa)、解説 (nges par bstan pa)、詳説 (so sor nges par bstan pa) と訳され³、この論書の【A5a】テキスト全体〔の体裁〕もこの三種〔の分類〕に立脚している。

[4.1.1] (仏宝)

[RGV I.4] (説示)

その〔三宝の詳説の〕内で第一、仏法の説示は、およそ〔の語で始まる偈頌によって示される〕。初・中・後がないものとは、無為なる法界である。「仏は無始無終」と〔『ナーマサンギティ』8章24偈に〕出ている如くである⁴。寂靜とは主体と客体とから構成される戯論が〔寂靜なの〕である。かの方〔すなわち仏〕は輪廻的生存の最後の時、師無くして自ら悟るので、仏果を自ら悟る者である。常住とは、世間的な道のようには再び後戻りすることがないこと。種々の思想 (lta ba) の深い森に囮まれた無明と疑念などの壁を壊すという〔具合に偈のことばは〕つながる。

[RGV I.5] (解説)

その〔説示、I.4偈に対する〕解説 (nirdeśa) は、無為でありという〔語で始まる〕。

[RGV I.6-8] (詳説)

その〔説示すなわち I.4偈に対する〕詳説 (pratinirdeśa) は、初・中・後〔という語で始まる三偈、すなわち I.6-8偈である〕。

法身について、dharmatākāya という語の、tā という接辞 (rkjen) があるなら、法性の身体という法界についていわれ、それ〔すなわち接辞〕がない〔つまり dharmakāya という語形〕ならば、智慧について言われる。ここでは状態 (gnas skabs gang yin pa) について説かれている⁵。

そこにおいて法界というのは、滅〔諦〕のことである。なぜなら、それ〔すなわち法界〕を体現したならば苦を滅することができるからである (I.8a)。【A5b】智慧とは道諦であり、後

述【の『宝性論』本文】でも同様である(I.8a)。

仏の色身は、所化の能力に応じて種々多様に現れるので【一概に】表現できない一方、法身と仏業は、一切仏において等しいので、【これらの偈頌は】遍満する普遍(spyi)について説いている。

[4.1.2] (法寶)

[RGV I.9] (説示)

第二、法寶についての説示は、およそ【で始まる偈頌】。四辺と語義分析(nges tshig)⁶を離れていることよって、知識とことばの対象としては存在せず、その二者(滅諦と道諦)は中觀の正理によって知られるべきである。聖者の自内証智(I.9b)は、あらゆる戯論の寂靜(I.9b)における、勝義としての滅の法であり、無垢智(I.9c)は、道の法である。なぜならそれ(自内証智)を体現することは、垢を離れることに基づくからである。この二者(滅諦と道諦)についてまたアールヤ・ヴィムクティセーナは、

有為(道諦)と無為(滅諦)は本質が同一なので相互に別なるものとして設定することはできないように⁷

と述べる。「光明の輝きをえる」とは、聖者の諸の三昧が光明をえていることであり、『口伝書』(Mukhāgama)に

吉祥なる善にして、究極に深い輝きをもつ、不二の光を備え⁸

と出ている【A6a】如くである。眼病(timira)とは無明のことである⁹。

[RGV I.10-12] (解説)

その【I.9偈の】解説(nirdeśa)は、不可思議【云々の偈頌】。滅【諦】とは無為・勝義であり、『勝鬘經』に、

世尊よ、一切衆生の領域を超えた苦滅諦とは、不可思議であり¹⁰、

とあるように。道【諦】とは、智慧・世俗諦である¹¹。戯論の寂靜とは、不二と無分別を意味する。【無分別なる】対象としての「法」(don gyi chos)のほかに(las)、【分別から構成されるような】ことばとしての「法」(sgra'i chos)が、ここで示されているのではない¹²。

[4.1.3] (僧宝)

[RGV I.13] (説示)

第三、僧宝は、**その自心は**〔の偈に始まり〕、その他の〔語句〕に接続する¹³。寂靜なる無我の究極と仏とは法身であり、『一切秘密タントラ』(2偈)に

ほかならぬ秘密にして最上なる自らの智にして、仏と智不二なるもの—それは不二かつ二の在り方を有する—に常に礼拝する。

といひ、『吉祥秘密集会』(18章2偈)に

一切衆生は仏の菩提たる金剛の在り方を会得している。

と仰った。障害とは界が見えること〔への障害〕である¹⁴。衆生の心は本性としては清浄であるに纏く。その法身が現れる時については【A6b】『口伝書』(*Mukhāgama*)に、

虚空と等しい法身・歡喜を、死、昏沈、奮迅、性瑜伽の際に、一瞬だけでも体験して瞑想したなら、人々の心は浄化される¹⁵。

という。

[RGV I.14] (解説)

無上の徳性とは、〔衆生心の〕本性として理解されたそのようなもの(如來藏)が声聞・独覺などの別の〔乗の者たち〕にはないから〔無上の徳性〕である¹⁶。あるいは、それ(無上の徳性)から〔仏〕眼と神通力など多くのものが生じるから〔無上の徳性〕である。

[RGV I.15] (詳説)

如實智の説示において、心の**本性が清浄**なので、そこにおいて煩惱の本性としての存在は、無始より尽きているものとしてみえるのである。

[RGV I.16]¹⁷

如量智の説示において、所知の限界とは、

〔衆生の〕心は、悟れば智慧なので、仏を他者として探求することなき想念を修習すべきである¹⁸。

といひ、『大日經』に

グヒヤカ族の主よ、さとりとは自心をありのままに知ることである。そのなかに法は微塵も存在せず、認識されない。それは虚空の特徴〔のように無自性である〕¹⁹。

といひ、『口伝書』に

一切の事物は専ら、自心を本性としている。そのことを理解するなら、仏の菩提はそれ自体（自心）である。三界もそれ自体（自心）である。〔四〕大（mahābhūta）もそれ自体（自心）である²⁰

といひ、『一切秘密タントラ』（150 偲 ab 句）に、【A7a】

自心を理解することによって悟りがある。〔外界の〕認識対象もまた、じつは〔自分の〕心にほかならない。

と仰った。

[RGV I.17]

聖者の自内証智によって見えるそれ（界）は、如実智によって染着がなく（chags med）、如量智によって障礙がない（thogs med）から²¹、声聞・独覺の智慧よりも清浄である。

[RGV I.18]

それゆえ、無上の仏智と近いから（upaniṣadgatatvād）と〔文が〕つながる²²。声聞の僧伽は、供養するに相応しくなく、帰依處ではないので〔『宝性論』には〕解説されない²³。

[4.1.4] （三宝の総括）

[4.1.4.1] （三宝説示の目的）

[RGV I.19]

以上の三〔宝〕が何に関して説かれたものかを示す〔偈頌〕は、教主たる仏と、教えたる正法と、弟子たる声聞の徳性を説示する目的と、三乗の中に入っている者と、その三〔宝〕を恭敬するなどによって供養（kāra）を為す三種の信奉者〔との計六種の人々〕に関してと〔いう具合に偈のことばは〕つながる。

[4.1.4.2] (帰依処と非帰依処の区別)

[RGV I.20]

帰依処と非帰依処との区分。〔法宝には、教説と証得 (āgama, adhigama) との法からなるが、その内〕教説の法は、道を体現した後に筏のように排除されるものであるから²⁴、そして〔証得の法の内、〕道の法は有為なので虚偽にして欺く性質を持つから²⁵、そして、〔証得の法の内、〕滅の法は、声聞のやり方によっては完全な非存在²⁶であるから²⁷、そして僧伽は恐れを伴っているから、教説と証得との二種の法と〔という具合にことばが〕つながる²⁸。

[4.1.4.3] (仏のみを帰依処とすること)

[RGV I.21]

仏【A7b】において三宝は揃っていて、直前に述べたそれら（法宝と僧宝）の欠陥²⁹が〔仏法には〕無いので恒常的な帰依処 (gtan gyi skyabs)³⁰である、と示す〔偈〕が正しい〔云々〕。聚とは僧伽である。これについては静閑地での手渡し ('brog gnas lag brgyud) などの物語が述べられた³¹。

[4.1.4.4] (宝の語義解釈)

[RGV I.22]

その三[宝]と宝石との両者を、ratna という同じ語で示したことについての語義解釈 (sgra don) の説示は、生じることが稀であるから云々〔の文言による〕。その三（宝）は涅槃の相続である³²。

[4] (七金剛句の詳説)

[4.1] (三宝)

ଦ୍ୟ-ଶ' (B4a) ଦ୍ୟ-କୁ-ପରିଷା-ମନୁଷୀ-କୁଶ-ପଦ-ଧକନ୍-ଦୀ ଦ୍ୟ-ପା-ମା-ଶ୍ଵି-ଦ୍ୟ-ଦେ-ତୀ କି-ଦ-ନ-ତୀ ଶ-ରି-କି-ଦ-
ନ-ତୀ କୁଶ-ପୁ-ଷକ୍ତି-ମନୁଷୀ-ପା ଦେ-ଶ-ପଦ-ମନୁଷୀ-ପା ଶ୍ଵେ-ଶ୍ଵେ-ତେ-ଶ-ପଦ-ମନୁଷୀ-ପା କୁଶ-ପୁ-ଷକ୍ତି-ମନୁଷୀ-ପା
ମନୁଷୀ-ପଦ-ଧକନ୍-ଦୀ ଏହାରେ ପଦ-ଧକନ୍-ଦୀ ଏହାରେ ପଦ-ଧକନ୍-ଦୀ ଏହାରେ ପଦ-ଧକନ୍-ଦୀ ଏହାରେ ପଦ-ଧକନ୍-ଦୀ ଏହାରେ ପଦ-ଧକନ୍-ଦୀ

(1 Buddharatna)

[4.1.1] (仏宝)

[RGV I.4] (ମଞ୍ଜନ୍ତପ)

ଶର୍ଷାକୁଶାର୍ଷାମାର୍ଷାମାର୍ଦ୍ଦୀ¹

ତେବେନ୍ଦୁଷ୍ଟିମାର୍କିନ୍‌କୋ । ବିଭାଗୀଶ୍ଵରପ୍ରଦୀପ୍ରଶ୍ନାପର୍ଯ୍ୟନ୍ତେ । ଦ୍ୱାର୍ଶିନ୍‌ମାର୍କିନ୍‌କେଣ୍ଟିଷ୍ଟମାର୍କିନ୍‌ପ୍ରଦୀପାଦିତମାର୍କିନ୍‌ପର୍ଯ୍ୟନ୍ତେ । ମହାଶବ୍ଦିମାର୍କିନ୍‌ପର୍ଯ୍ୟନ୍ତେ । କୃତ୍ତିମମାର୍କିନ୍‌ପର୍ଯ୍ୟନ୍ତେ । ଲୁହାଶବ୍ଦିମାର୍କିନ୍‌ପର୍ଯ୍ୟନ୍ତେ ।

[RGV I.5] (ଦେଶ'ପତ୍ର'ମଞ୍ଜନ'ପା')

ଦେଖିବାକୁ ପରିବାରର ମଧ୍ୟ ଏହାର ଅନ୍ତର୍ଭାବ ହେଉଥିଲା ।

[BGV I 6-8] (ଶ୍ରୀକୃଷ୍ଣମାତ୍ରମାତ୍ରମା)

(2 Dharmaratna)

[4.1.2] (法宝)

[RGV I.9] (ମଞ୍ଜନ୍ତର)

¹ *Nāmasamgīti*, VIII.24

²5 em., 5 AB

੩੫ੴ em., ੫ੴ AB

⁴ଯମ' B; ଯମ' A

[RGV I.10-12] (टेसा॑पद्मसङ्कृ॒त्य) द्विदी॑टेसा॑सङ्कृ॒त्यै॒पशमा॑मोद॑केसा॑पा॒प्तिक॑या॒ वर्णेषा॑पा॒कै॑प्रदुषा॑मा॑प्रुषा॑द्विद॑द्विद॑पा॒प्तिक॑तो॑
द्विपश्चाद॑स्तेषा॑स्तेषा॑द्विद॑प्रद॑प्रद॑यशा॑

पर्कर्मा॑ल्लन्॑पद्वशा॑स्तेषमा॑ठक॑स्तेषमा॑ठद॑ग्री॑प्युवा॑यशा॑प्रदुषा॑मा॑प्रुषा॑स्तेषा॑पर्णेषा॑पर्णेषा॑पर्णेषा॑
पा॒कै॑पशमा॑ग्री॑प्रुषा॑पर्णे॑ । ४

ब्रेषा॑प्रुषं॑पा॒पर्णेषा॑पर्णे॑ । प्रगा॑कै॑प्ये॑ब्रेषा॑ग्री॑त्तेषा॑ग्री॑प्रद॑पा॒प्तिक॑र्णे॑ । त्तेषा॑पा॒पर्णे॑
(B5a) प्रगित्तेषा॑मोद॑द्विद॑त्तेषा॑मोद॑ग्री॑त्तेषा॑र्णे॑ । त्तेषा॑ग्री॑त्तेषा॑प्रुषा॑ग्री॑त्तेषा॑प्रुषा॑त्तेषा॑ ।

(3 *Samgharatna*)

[4.1.3] (僧宝)
 [RGV I.13] (षष्ठ॒व॑प्ति)
गृष्मा॒प॑द्योऽुक्त॒न्दर्शक॑मर्क्षा॒कृ॑त्ति॒स॑म॒षाद्॒^५ज्ञेया॑द्य॒म॒र्गा॒द्य॒^६केषा॑ष्टु॒र्स॒॑। स॑द्या॒म॒द्य॒प॑ति॒
म॒ष्टु॒र्स॒॑कृ॑त्ति॒म॒द्य॒म॒र्गा॒कृ॑त्ति॒स॑म॒षा॒र्द्य॒म॒र्गा॒प॑ति॒कृ॑त्ति॒प्ति॒

ସର୍ବଶେଷାସନାଦିଷ୍ଟାମନୀ ।
ଶଦ୍ଵାକୁଶାଯେଷାସନୀଶାଶ୍ଵାମନୀ ।
ଶନୀଶାପଦାମନୀଶାଶ୍ଵାମନୀ ।
ଶଦ୍ଵାକୁଶାକଣାମନୀଶାଶ୍ଵାମନୀ ।

୫ୟାସାନ୍ତେ ପରିମାଣାଙ୍କାରୀ

ଶେମଶ' କନ' ସମଶ' କନ' ଶର୍ଷା କୁଣ୍ଡା ।
କୁଣ୍ଡକୁଣ୍ଡ' ହେତି' ଶର୍ଷା ଶେମଶ' । 8

1. B; 2. A

²Vimuktisena, D 42b3.

³*Mukhāgama*, D 1a2.

⁴RGVV (tib.) 21.12-18.

⁵Cf. શેખસ.

⁶ ສາංක්‍රාන්තික ප්‍රතිච්‍රියාව B; සාංක්‍රාන්තික ප්‍රතිච්‍රියාව A

⁷ *Sarvarahasya*, verse 2

⁸ *Guhyasamāja*, XVIII.2

॒ बे॒षा॑ मा॒ सु॒ दा॒ षा॑ र्षी॑ । ॒ त्रि॑ वा॒ दा॒ वा॒ म॒ व॒ दा॒ वा॒ व॒ दा॒ । ॒ श॒ वा॒ दा॒ क॒ दा॒ श॒ वा॒ दा॒ वा॒ व॒ दा॒ । ॒ त्रि॑ वा॒ दा॒ वा॒ म॒ व॒ दा॒ वा॒ व॒ दा॒ । ॒ त्रि॑ वा॒ दा॒ वा॒ म॒ व॒ दा॒ वा॒ व॒ दा॒ ।

॒ क॒ दा॒ श॒ वा॒ दा॒ वा॒ वा॒ वा॒ वा॒ ।
॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।
॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।
॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।
॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ । ४

॒ बे॒षा॑ र्षी॑ ।

[RGV I.14] (टे॒ षा॒ य॒ दा॒ वा॒ व॒ दा॒ वा॒)

॒ श॒ व॒ दा॒ । ॒ व॒ दा॒ ।

[RGV I.15] (वा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ वा॒ व॒ दा॒ वा॒)

॒ व॒ दा॒ । ॒ व॒ दा॒ ।

[RGV I.16]

॒ व॒ दा॒ ।

॒ व॒ दा॒ ।

॒ बे॒षा॑ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।

॒ व॒ दा॒ । ॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।

॒ बे॒षा॑ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।

॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।

॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।

॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।

॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ । ७

॒ बे॒षा॑ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ । ॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ । (A7a)

¹ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।

² व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।

³ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।

⁴ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ व॒ दा॒ ।

⁶ 越智 1992: 9.1-4

⁷ Mukhāgama, D 3a7-b1

⁵ Cf. D 4003, 173a1-2, etc.

ସ୍ଵର୍ଗ-ଶୈମାଶ-ହୃଦୟ-ଶରୀର-କୁଷ-ଟେ ହୃଦୟ-ଶରୀର-ପ୍ରାସର-ଶୈମାଶ-ଶିଦ-ଫିଳ
ଶୈମାଶ-ପ୍ରାସର-ଶରୀର-କୁଷ-ଟେ ।

[RGV I.17]

[RGV I.18]

ଦେଶ-କ-ଶାସ-କୁଣ୍ଡା-ପ୍ର-ମେଷ-ଶ୍ଵର-ପ୍ରେତ-ନନ୍ଦ-କେ-ପରି-ଶ୍ରୀର-କ୍ଷେତ୍ର-ଶ୍ଵର-ହୋ । ଶକ-ବ୍ରହ୍ମ-ଶ୍ରୀ-ଦଶ-ତ୍ୱରକ-କି-ମର୍କଦ-ଧର-ଶ୍ରୀ-
ଦେଶ-ମେଷ-ଶ୍ଵର-ଶା-ପିତ୍ର-ମା-ପା-ମ-ଶର୍ମଦ୍ଵୀ ।

[4.1.4] (三宝の総括)

[4.1.4.1] (三宝説示の目的)

[RGV I.19]

[4.1.4.2] (帰依処と非帰依処の区別)

[RGV I.20]

[4.1.4.3] (仮のみを帰依処とすること)

[RGV I.21]

[4.1.4.4] (宝の語義解釈)

[RGV I.22]

¹ *Sarvarahasya* v. 150ab

²एवं A; एवं B

参考文献

略号

<i>Abhisamayālaṅkālālokā</i>	<i>Abhisamayālaṅkārālokā Prajñāpāramitāvyākhyā</i> (Haribhadra). Ed. Wogihara, Unra. Tōyō Bunko, 1932-1935 (repr. 1973).
<i>Abhisamayālaṅkāravivṛtti</i>	<i>Abhisamayālaṅkāravivṛtti</i> (Haribhadra). Ed. K. Amano. Kyoto: Heirakuji shoten, 2000.
<i>Caryāmelāpaka</i>	<i>Caryāmelāpaka pradīpa of Āryadeva</i> . Ed. Janardan Shastri Pandey. Sarnath: CIHTS, 2000.
<i>Guhyasamāja</i>	<i>The Guhyasamāja-tantra: A New Critical Edition</i> . Ed. Matsunaga, Yuhei, Osaka, 1978.
<i>MĀ/Mukhāgama</i>	<i>Dvikramatattvabhāvanānāmamukhāgama</i> , D 1854.
<i>Nāmasaṅgīti</i>	Ed. Raghu Vira, Śatapiṭaka vol. 18
<i>RGVV</i> (tib)	中村瑞隆、『蔵和対訳究竟一乘宝性論研究』、鈴木学術財団、1967。
<i>Sarvarahasya</i>	<i>Sarvarahasya nāma tantrarāja</i> , D 481.
<i>Vimuktisena</i>	<i>Abhisamayālaṅkāravṛtti</i> (Ārya Vimuktisena), D 3787.
『大乗究竟論要義』	rNgog Blo ldan shes rab. <i>Theg pa chen po rgyud bla ma'i don bsdsu pa</i> . Dharamsala, 1993.

二次資料

磯田熙文

1985 「『*Abhisamayālaṅkāra*』の三身説と四身説」、『印度学仏教学研究』67、94-101 頁。
越智淳仁

1992 「新校訂チベット文『大日經』」、『高野山大学論叢』27、1-24 頁。

加納和雄

2010 「チョムデンリクレル著『大乗究竟論莊嚴華』和訳および校訂テキスト（1）」、
『高野山大学論叢』45、13-55 頁。

(平成二十四年度科学研究費補助金〔若手 B: 課題番号 23720030〕による研究成果)

注

¹ 加納 2010 参照。

² 主題項目は、前稿で示した本書冒頭に掲げられ、[1] 七金剛句の略説、[2] そ〔の金剛句〕が經典に説かれたあり方、[3] 七〔金剛〕句の順序の確定、[4] 七〔金剛〕句の詳説、[5] 〔七金剛〕句を信解することの功徳を教示することである。という五項目からなる。本項目は、[4]に相当する。

³ 「説示」は『宝性論』の根本偈に相当し、「解説」と「詳説」は『宝性論』の釈偈に相当。

⁴ *Nāmasamgīti*, VIII.24: anādinidhano buddha ādibuddho niranyavayah //

⁵ dharmatākāya の議論については、下記が典拠となっている。*Abhisamayālaṅkārāloka* (ed. Wogihara) p. 916.10-11: sa eva ca dharmatākāyo dharmakāya iti bhāvapratyayalopād vyapadiṣyata iti ... 「そして、その同じ dharmatākāya が、dharmakāya という〔語形でもって〕、状態を示す接辞 (-tā) を省略脱落することによって示されている」。Cf. *Abhisamayālaṅkāravṛtti* (ed. Amano) p. 105 (Ms. 25b5), 磯田 1985:95.

⁶ 「四辺と語義分析」：四辺は I.9偈 a 句所説の「有、無、有かつ無、非有かつ非無」の四者を指す。「語義分析」（nirukti、語呂合わせによる語義解釈）について RGVV は次のように解説する。「あらゆる自然音、人工音、鳴声、ことば、解説、慣用表現、交信などの言栓によっては表現できないから」(sarvarutaravitaghoṣavākpathaniruktisam̄ketavyavahārābhilāpair anabhilāpyatvāt).

⁷ 内容はヴィムクティセーナに由来するが、実際にはハリバドラを介しての孫引きである。*Abhisamayālaṅkārāloka*, D 3791, 25b7: 'dus byas dang 'dus ma byas dag ngo bo nyid gcig ba nyid kyis phan tshun tha dad par gdags par mi nus pa bzhin du /...; ibid. Skt. ed. Wogihara, p. 19: samśkṛtāśamśkrtyor ekarūpatvena parasparam aśakyavyatirekaprajñaptivat ... Cf. Vimuktisena, *Abhisamayālaṅkāravṛtti*, D 3787, 42b3: de la 'dus byas ni lam mo // 'dus ma byas ni spangs pa ste / de gnyis phan tshun tha dad par gdags par mi nus pa nyid kyis na ...

⁸ *Mukhāgama*, D 1854, 1a2.

⁹ Cf. RGVV (tib.) 23.3: rab rib = gti mug.

¹⁰ Cf. RGVV (tib.) 21.12-18.

¹¹ Cf. RGVI.10d; RGVV (tib.) 35.13 (lam ni 'dus byas kyi mtshan nyid du rtogs pa); RGV I.145.

¹² すなわち、法寶が「不二、無分別」という場合、その「法」が「ことば」を意味しているのならば、無分別なるものとはなりえないため、そのような論難を予想して、法寶の「法」とは、「ことば」による教説を意味するのではなく、その教説に示された「内容」を意味することを述べている。

¹³ 本書に引用される本文の語 rang gi sems de は、テンギュル本において sems de rang bzhin (taccittaprakṛti^o) とあり、訳語が異なる。「その他の〔語句〕」（gzhan dag）と訳した一文は、詳細不明。本書は本文からの語句のように扱っているが、gzhan dag なる語は、『宝性論』チベット訳、サンスクリット共に対応する語を欠くため、暫定的に上記のように訳した。

¹⁴ Cf. RGVI.17.

¹⁵ *Mamukhāgama*, D 1853, 15a7: chos sku rab dga' mkha' mnyam pa // shi dang brygal dang gnyid log dang // glal dang 'khrig dus skad cig tsam // myong bar 'gyur bas rab bsgoms na // lus can rnams ni yid ni sbyong //

¹⁶ Cf. RGVV ad I.18.

¹⁷ 以下、I.16-18 は RGVV ad I.18 upaniṣadgata の説明につながっている。

¹⁸ 未比定。

¹⁹ 越智 1992: 9.1-4: gsang ba'i bdag po de la byang chub gang zhe na / rang gi sems yang dag pa ji lta ba bzhin yongs su shes pa ste / de yang bla na med pa yang dag par rdzogs pa' byang chub bo // gsang ba'i bdag po de la ni chos rdlu tsam yang med cing mi dmigs so // de ci'i phyir zhe na / byang chub de ni nam mkha'i mtshan nyid de /... Cf. *Caryāmelāpaka*, p. 38: svacittasya yathābhūtaṇi pariṇānaṇi bodhiḥ.

²⁰ *Mukhāgama*, D 1853, 3a7-b1: dngos kun gtso bo rang sems kyi // ngo bo nyid de de rtogs na // sangs rgyas byad chub de nyid do // 'jig rten gsum yang de nyid do // 'byung chen rnams kyang de nyid do //

²¹ *RGVV* ad I.17 (tib.) 29.5-7.

²² ただしここに引用される文言 *dang nye ba'i phyir* は、テンギュル本の読み *dang nye bar gnas par 'gyur pa'i phyir* と異なる。*RGVV* ad I.18 (tib.) 29.11 参照。

²³ *RGVV* ad I.18 (tib.) 29.15-16.

²⁴ Cf. *RGVV* (tib.) 35.10-11.

²⁵ Cf. *RGVV* (tib.) 35.13-14.

²⁶ 字義通りは「絶対否定」(med dgag)。Cf. *RGVV* ad I.20: abhäva, med pa.

²⁷ Cf. *RGVV* (tib.) 35.15-17.

²⁸ Cf. *RGVV* (tib.) 35.9.

²⁹ *sngar bshad pa'i skyong*. Cf. *RGVV* (tib.) 35.11: *sngar bshad pa'i tshul* (= *RGVI*.20).

³⁰ Cf. *RGVI*.20d: *gtan gyi skyabs mchog ma yin no //* 「〔法宝、僧宝は〕最上の恒常的な帰依処ではない」

³¹ 未詳。*RGVV* ad I.21 に関連する『勝鬘經』においても、この典拠となる話は見当たらない。

³² 「涅槃の相続(mya ngan las 'das pa'i rgyud)」。rNgog Blo ldan shes rab は『宝性論』所説の三宝を二種に分ける。三宝を結果として扱うもの(『大乗究竟論要義』2b2-3a6, Cf. RGV I.3)、と、原因として扱うもの(『大乗究竟論要義』3a6-6a1, Cf. RGV I.26)である。Cf. 『大乗究竟論要義』2b2: mi gnas ba'i mya ngan las 'das pa'i 'khor lo'i dbang du byas pa dang / dkon mchog gi 'khor lo'i dbang du byas pa'o. Cf. *Munimātālanīkāra*, Abhayākaragupta, D 3903, 213b3.